教職員と市民でつくる人権教育情報紙

はじけるこころ

Vol.38

まいにち学校 まいにち街 の中 こどもの笑顔につなげる

発 行　箕面市人権教育推進会議
箕面市教育委員会　人権教育課

TEL 072-724-6921
FAX 072-724-6010
E-mail:edujinken@maple.city.minoh.lg.jp

「はじけるこころ」は、教職員と市民でつくる人権教育情報紙です。今回より、幼稚園・保育所・小中学校の保護者の皆様にも人権教育について、いっしょに考えていただくために配布することとなりました。

人権教育と聞くと「差別してはいけない」とか「人権を大切にしなければいけない」というように「してはいけない」ことを教える後ろ向きのイメージを持つ方も多いかもしれませんが、実はそんなことばかりではありません。むしろ、様々な境遇にある私たち一人ひとりが、自分の望む生き方を追求する力をつけ、また、それができる社会づくりを担う力をつけることこそが人権教育です。箕面市には、そうした教育活動に取り組む人・団体が数多くあります。本紙は、人権教育の話題を子どもたちの活躍とともに紹介することで、市民の間に一人ひとりを大切にする「つながり」が拡がることを願っています。（編集委員　若槻 健）

編集委員は様々な分野の人で構成されています。
みんなが思っている「人権教育」を委員すべてが活発に対話を重ねてすすめています♪

もくじ

表紙 …… 1
研修報告 オトナのためのLINE教科書 …… 2
司書さんのおすすめ本 のにっき ―野日記 …… 5
イキイキさわやかに学ぶ会
●報告その1 出会いのワーク『ふつう』の日常から ―歩深めて考える人権 …… 6
●報告その2 「在日を生きる」 ～在日3世の視点で見る多文化社会～ …… 7
情報・いま知りたい！ 「箕面東高がエンパワメントスクールに」 ～学び直しの授業、考え生き抜く力～ …… 9
子どものきもち 駄菓子屋さんからみえる地域の子どもたち ～未来の社会の作り手 「だがしや楽駄屋」のおはなし …… 11
活動紹介・しみんのじんけん♪ 障害者と共にを考える企画グループ ちまちま工房 …… 12

「研修ーオトナのためのLINE教科書」

7月29日に開催された箕面市教職員研修で、大阪府立旭高校の生徒の講師による「オトナのためのLINE教科書」に出席させていただきました。同校で現代社会を担当されている携帯電話を持たない佐藤教諭への授業『先生に教えたろ！LINE』でした。

世代間の情報能力格差を「デジタルデバイド」と呼ぶそうです。私はコンピュータをもう30年間位は仕事や家庭でも使っていて、速い進歩も知っています。

ただLINEは使えても、学生時代に使ったことがなかった私は、高校生がデジタルネイティブ（生まれつき）なら、デジタルイミグラント（移民）でしかなかったように感じます。

格差がある

なら日頃から使いこなしている高校生の集団から学ぶ。

可能なら高校生から便利さと怖さを中学生や小学生に教える。そんな教育はできないものでしょうか。

旭高校では87％の生徒がLINEを使用しています。ある県では、教員10年目の100人程度の研修の中でLINEを使用している先生は3人。

LINEは初期設定で友だち自動追加をオフにしなければスマートフォンの電話帳情報が送られ、5千万人の加入者のなかから検索され、LINE友達が勝手に表示されます。無論相手も始めたことを知ることができます。

インターネット（ネット）で困ったら相談相手の一番は携帯電話では親ですが、スマホは友達だそうです。旭高校生によると複数の人が同時にやりとりできるグループトークは200人が登録出来て、クラス全体やクラブ全体にも連絡が可能です。

情報伝達としては電話の連絡網が瞬時に伝わるイメージです。

スタンプも私は良くわかりませんが、気持ちを表すそうです。動画も送ることができます。グループトークでは、いじめが発生しやすいといいます。

グループトークで既読無視や強制退会を恐れて、いつでもスマホを触っていたり、やりとりが終了できずに食事中も風呂場でもスマホを握りしめている人もいます。

「返信不要」のスタンプや「おかんが怒っているので終わり」のスタンプが欲しいと報告していました。

個人と個人との間に信頼関係が希薄になっているにも関わらず、一方では広がりのない世界で濃密に密着し合っているようにも見えます。

旭高校の生徒は6ページにも及ぶ報道されたLINEの資料も収集していました。

裸を撮影されLINEに流され、陰湿で凄惨な結果を生むいじめもおきていま

す。これは犯罪です。

ネット上なら何を書いても捕まらないと誤解して「お願いだから死んで」とLINEで書いたある大学生は自殺教唆容疑で逮捕されました。女子校生になりすました20代後半の男性からの誘いは、女子高生を犯罪に巻き込む可能性もあります。

旭高校の生徒の講義には「説得力」がありました。というのも問題や疑問を抱えている世代が、自ら考えて話し合って、調査して発表していたからです。

買い与えただけのスマホで、子どもたち自身が強い依存症に困惑しています。お母さんが悪者になり、受験や試験が近づいたのでお母さんがうるさくなった。あるいは、夜はスマホを取り上げられるという言い訳を作ってあげることでスマホとの距離を置く作戦もあるそうです。

猪名川町の中・高生による「スマホサミット宣言」は

1. 私達自身でルールを作ります
夜○○時まで
個人情報を書かない　心を広く
2. リアルなコミュニケーションを大切にします
3. 書いていいか　ダウンロードしていいか立ち止まって考えます

と書いています。

LINEは操作が簡単、気軽に使えて履歴も見やすい、既読機能も災害時の存在確認などにはやはり便利です。

親世代もLINEを通じて子どもの悩みを知り、情報能力格差を縮めてみませんか。

でも、信頼関係を築くためには、会ってフェイストゥフェイスで話すこと。

話せない内容を、LINEには私たちは書かない。そんなことを考えさせられた研修でした。

（編集委員　雑喉 良）

参考文献

■スマホチルドレン対応マニュアル
竹内 和雄　2014／5
副題が「依存」「炎上」これで防ぐ。
※お薦めです。

■ネットいじめはなぜ「痛い」のか
原 清治・山内 乾史　2011／11

■いじめの構造
内藤 朝雄　2009／3

■ネットいじめ
荻上 チキ　2008／8

箕面市の学校図書館の歴史

箕面市では市民や学校現場からの要望に応えて、1992年から学校図書館に専任の司書（学校司書）を置いています。大阪府内の公立小中学校では初めてのことで、この取組は当時大変注目を集め、司書の配置校にはたくさんの視察や取材があったそうです。

1998年には、市内全ての小中学校への司書配置が完了しました。

子どもたちは朝登校してから下校するまでの間、いつでも図書館を利用できます。休み時間や放課後はもちろん、授業でも図書館が活用されています。小学校では週に1回「図書の時間」があり、自分の好きな本を読んだり、調べ学習を行ったりします。司書は教員方と協力して、絵本の読み語りや本の紹介をしたり、図書館や資料の使い方を児童に伝えています。中学校でも、様々な教科の中で図書館が活用されています。箕面市の学校図書館は子どもたちの「知りたい」「読みたい」に応え、一人ひとりへのサービスを通じて、全ての子どもの育ちと学びを支えています。

司書さんのおすすめ本。

『のにっき　―野日記―』

近藤 薫美子／著
アリス館 1998年

野原の小さなケモノが死にました。草むらに横たわる体は風雨にさらされ、昆虫や鳥たちの巣となり餌となり、めぐる季節の中で大地へとけ、植物を育てる養分になっていきます。かつてのケモノが眠る土の上でカマキリは孵化し、チョウは蜜を求め、カエルはヘビと遭遇します。そうして美しい花々が咲き誇る野をまた次世代のケモノが駆けぬけるのでした。本来は直視するのがつらい〝死〟をおごそかでありながらユーモアを秘めた観察眼でとらえ、尽きるいのちとそこから恩恵を得るいのち、自然の循環を言葉少なに描いた絵本です。

2年生のN子さんがポケットにヘビらしき死骸を忍ばせて図書館へ来たのは、昨夏のこと。道でアリに襲われているところを助けたものの、時すでに遅かったそうで、「しっぽはもうコチコチだけどお腹はまだやわらかいんだよ」と触らせてくれました。一緒に図鑑をめくった結果、毒性のないアオダイショウの幼蛇ではないかと思われました。他にも、ペットボトル内にいっぱい溜めたミジンコを抱えてプランクトンの本を借りに来た子、ゴキブリを捕まえたからと飼育法を調べに来た子、身の周りの生き物に向けてほとばしる子どもたちの旺盛な好奇心には何度も驚かされました。

大人が気づかないものや目をそらしてしまうものも、子どもの目はまっすぐ見つめます。今後はどんな出会いがあるでしょうか。瑞々しい発見に寄り添えることを楽しみに、図書館へとせまる足音を聞いています。これはどこの学校にもきっといるN子さんたちと読みたい、野生味の香る1冊です。

萱野北小学校図書館司書

イキイキさわやかに学ぶ会

この会の目的
新箕面市人権教育基本方針のもと、学校の保護者はじめ市民の方々に人権についての学習機会を提供し、自らの人権はもとより、他人への思いやりを大切にする心を養い、差別のない社会をめざすことを目的としています。

◆出会いのワーク

『ふつう』の日常から
一歩深めて考える人権
講師　栗本敦子さん
Facilitator's LABO（えふらぼ）

去る6月5日、箕面文化交流センターにて2014年第1回目のイキイキさわやかに学ぶ会が行われました。

栗本さんより参加型で運営することや、本日の流れを説明いただき、オリエンテーションからスタート。

その後、栗本さんの進行により70名ほどの参加者が誕生日順に並びました。二重の輪になり向き合い、ペアで話をするのです。目的の1つに「『気持ち』に焦点をあてること」を掲げられました。

1、今日の調子、今の気分　2、最近うれしかったこと　3、私が腹の立つ時の対処法　4、3つの問いを話してみて感想を言い合う

3つ目は話しにくい問いでしたが、「『怒る』とは、エネルギーのいる感情で、安全を考えながら上手に付き合うことが大切」の言葉に会場のみなさんは、大きくうなずいていました。

お互い聴き合う中で、相手に寄り添い、尊重し「聴く」の漢字からもわかるように「十四の心できく。」「傾聴」について学びました。

つい保護者は聞きたがってしまう。子どもにとってそれは時として「尋問」になっていないか？ただひたすら「そうなんやぁ～」のみで聴いてみる日常を提案されました。

その次に、1組4名のグループに分かれ、「5円玉を見たことがありますか？」をテーマにみんなで力をあわせて5円玉の裏表の絵を描きました。

参加者は「え～書かれへん（汗）」となるグループも多く、日々見ていると思っているのに全く違う5円玉の絵になり、栗本さんより正解を見せていただいた後、あまりの違いに各々のグループで笑いが沸き起こりました。

このワークでの発見は、「当たり前」と日常で思っていることも実は、意外と認知していないということです。これからは、どんなことも少し考え、問うてみようと参加者のみなさんは思ったのではないでしょうか？

その後も「宇宙人がやってきた」のワークは、「人間って？○○です。」と宇宙人に、人間を説明するもので、各グループで話し合い、1つずつキーワードを挙げていきました。

並べられたキーワードから他の動物にも当てはまる言葉を抜き出します。残った言葉が「人間」を示すのであり、そこから人間として何が大切なのか「人間の権利」というものが、おぼろげながら見えてくるのです。「人権」の定義はなかなか一言でいうのは難しいなぁと感じました。　最後のワークでは「ふつう」って？を深めて考えました。

20名に1人は「同性愛者」と統計で言われていて、日々、公言することができない圧力を感じる人が少なくないことや、様々な人権問題に対して身構えてしまうかもしれないが、少しずつでも話ができる社会の在り方や、多面的な視点をもつことによって、知らず知らずに「こうあるべき」という考え方が、人を傷つけていることもあるという事実を考えるきっかけをいただきました。

日常を丁寧に見つめなおすことで、自らの行動や社会の中のイメージ、子どもたちからのメッセージも受け止め方が違ってくることなど、明日につながる多くの学びをいただきました。（編集委員　永田 千砂）

◆「在日を生きる」

～在日3世の視点で見る多文化社会～

講師　金 生遵さん

豊中市渡日児童生徒相談室

（要約）

私は、渡日児童生徒相談室という職場で働いていて、外国から来る子どもたちや帰国生たちの日本語や学習を支援しています。学校に外国人児童生徒が入ってきたときに通訳を派遣したり、「日本語教室」を開いたりして、クラスで頑張って行けるようにしています。

私自身も在日という「オールドカマー」です。韓国／済州島（チャジュド）からやってきた祖父母から数えると3世代目ということになります。

いい出会いをさせたい

さて、外国から来た子どもたちは「日本語教室」という場所で放課後に日本語を学んでいます。

外国からの子の多くは全く日本語がわかりません。そして日本に来る理由は、様々です。

結婚・留学・就職・

少数ですが難民など、理由は様々だとしても、これから長い期間をかけ日本に定住していくわけです。その子どもたちがソフトランディング、学校にスーッと適応できるようにするのが僕の仕事です。

僕は、ここで「出会い」という言葉を使いますが、こういう子どもたちとの出会いが僕にとってはすごく大切なんです。こういう子どもたちとクラスの子どもたち、学校や地域の人たちと結びつけてあげたい、「いい出会い」をさせてあげたいというのも僕の一つの考え、想いです。

彼らとの「出会い」は日々さまざまな驚きを与えてくれます。それは「異文化体験」といえるのです。学校の中でも、社会の中でも「様々な相違」、「ちがい」があるわけです。「出会い」とはつまりそういうことなのです。決して良い面ばかりとは言えません。それに「出会い」には必ず「違い」がついてきます。ビデオで見ていただいたように、子どもたちは日本語の上達も早く、楽しそうにイキイキしていますが、ああいう子どもたちは日本と「いい出会い」ができたわけです。ところがいつもそういう上

手い「出会い」ばかりとは限りません。

母語を持ち続けることも大切

一例を言うとフィリピンから来たある兄弟は、日本国内を転々として大阪にやってきました。

フィリピンからきたこの兄弟のご両親は、生活のために働くのに必死で、子どもたちを学校に入れて、夜遅くまで働いています。彼らの夕飯はコンビニ弁当も多く、家では当然テレビを見る時間が増えます。そして彼らはあっという間に日本語を覚えました。外国から来た子たちが自然と「バイリンガル」になるというのは間違いです。生活の中で母国語と日本語を置き換えてしまいます。母国語と引き換えてしまうのです。親がよほど気を付けない限り「バイリンガル」には育ちません。そして彼らのように母国語を失ってしまう子が多いのです。確かに学校ではコミュニケーションが出来るようにはなりました。しかしその「代償」として親子間でコミュニケーションが断絶するような事態が起きています。彼らはどうやって両親とコミュニケーションすると思いますか…？電子辞書を使っているといいます。悲しいことです。ほんの少しばかり教育行政に関わるものとして話しますが、私たちの目的は彼らを日本人にすることではありません。私たちはつい、こういう子らの日本語力をのばすことばかりに注力してしまいます。でもその過程で本人も気付かないうちに母国語を失ってしまいかねない。母国語＝アイデンティティーとも言えます。

フィリピンの子はフィリピンの子のままで大きくなってほしいわけです。彼らがやがてどう生きるかは本人の選択ですが、でもその選択ができるまでは「彼らのまま」で大きくなってほしいと思います。しかし、私が思うにこのこと、つまり「自分と違うものを違ったままの形で受け入れようとしない」のは私たちの社会が抱えてきたある意味「課題」だと思うのです。

それは、在日1世のころから抱えてきた一つの課題だと感じています。在日朝鮮人の人は朝鮮人のままでよかったのに、まるで「日本人のように」振る舞い生きてきた。生きざるをえなかった。

共生の社会を実現

今、学校現場にいる同級生に在日の子がいれば、4世～6世の時代です。ですから、私たちが経験した在日1～3世のころとずいぶん違う価値観を持って生活をしています。アイデンティティーに対する感じ方、考え方も多様化しています。だから、彼らには彼らの価値観があると思っていますから、「古い時代」の在日の話をいつまでも引きずるのは良くないことなのかな？と、「当事者」として感じています。しかし、たとえそうであっても過去のことを正しく知ることはやはり大切なことで、そのベースの部分に立って新しい関係を作っていってほしいと思っています。「語り部」として「在日」1世の事を話せる人は今後少なくなっていくでしょう。みなさんのまわりにも在日コリアンとかもっとマルチな文化や、国籍を持つ方が暮らしておられるかもしれません。そういうことを理解していただきながら、学校社会、地域社会といったものが、違いを受け入れる、さまざまな立場の人たちと一緒に共生していく社会であってほしいと思います。

（事務局　橋本 敏）

◆「身近な問題から ジェンダーについて考える。」

講師　浮穴 正博さん

去る、2014年10月9日メイプルホール小ホールにて「身近な問題からジェンダーについて考える。」をテーマに浮穴正博さんのワークショップに参加しました。

ここで私自身にもジェンダーのバイアスがかかっていることを実感しました。お名前を見ればわかるのですが・・・部屋に入った途端、少し違和感がありました。それは講師が「男性」であると想定してなかったこと。「ジェンダー」の講座などで「男性」の講師に出会ってきてなかったこと。「どんな話をしてくださるだろう…」ドキドキしながら席に着きました。また、会場を見渡し定員100人のホールが満員の中、男性参加者が1名で、女性がほとんどであることにも驚きました。

浮穴さんは、参加者と一緒に対話する進行で、会場は終始リラックスした雰囲気でした。ご自身の家族の話をはじめ、富田林での活動についても話していただきました。

その後は参加者に配布された富田林・発・ジェンダーエッセイ集「めざめる女　つぶやく男」を黙読。このエッセイ集はジェンダーをテーマに「これってなんか変じゃない？」と思っていることを募集されて集まったエッセイで構成されており、資料にはその中から抜粋された作品が掲載されていました。

皆さん熱心に読んでおられ、感じたことや自分自身のことを約4名1グループで大いに話しました。お互いの価値観を話し、実感したのは「男女共同参画」や「男女平等」がまだまだ根付いていないということ。たとえば、料理をはじめとする家事を担っているとおっしゃった方が多く、男性は外で働いているご家族が多い印象を受けました。

エッセイ集をみながら大いに話し会場はみなさんの声でとてもにぎやかでありました。

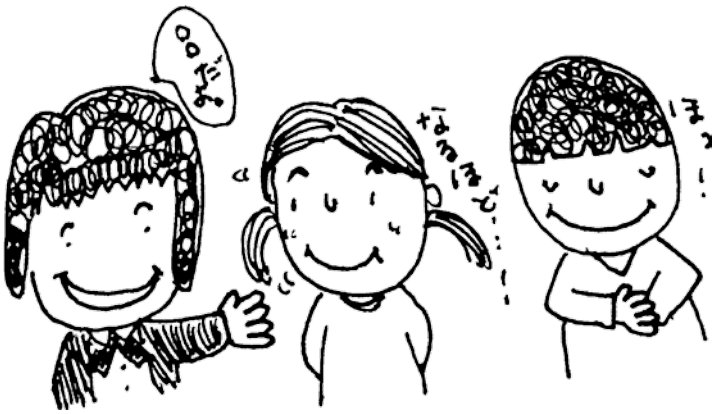
その後も新聞の取りぬきとその記事を話題にしているブログが掲載されている資料を基にジェンダーについて思考を深めていきました。

記事の内容は、看護士の妻が忙しいので家事を半分やっている男性の投稿。いつも彼女は「ありがとう」と言い、妻を支えている自分自身も間接的に人のいのちを支えている・・・と書いてある。「この記事をお読みになってみなさんどう思われますか・・・」と浮穴さん。思わず私は「何が言いたいのかわからなくて気分が悪い」と発言し会場が一瞬苦笑いとゆるんだ雰囲気になりました。浮穴さんは静かにこう続けられました。「この記事を読んで家事をされていて、素晴らしくてうらやましいと発言する方も少なくないんですよ。」と。

一人ひとりのジェンダー規範が、「その人らしい」を奪っていたり、自分自身で狭めていたり、存在自体を軽んじられていることを再確認しました。

女だから、男だから、妻はこうで、夫はこうでなくちゃならない・・・。昔の話じゃないということを参加者からも学ぶことができました。エッセイを読んだように、お互いの日々の暮らしの中で、ちょっとした疑問や意識を話気づき合うことによって、人を大切にすることにつながる。そんな可能性を感じた素敵な時間でした。

（編集委員　永田 千砂）



「箕面東高がエンパワメントスクールに」

～学び直しの授業、考え生き抜く力～

来年度から箕面東高校が「エンパワメントスクール」になります。小・中学校でつまずいてしまったところの学び直し、答えが一つではない課題を考える学習や体験学習を通じて、社会で活躍するための力を育む、新しいタイプの高校です。来年度は他に、西成高校（大阪市西成区）、長吉高校（大阪市平野区）が同じく改編されます。

箕面東高校で7月に開かれた説明会では、参加者が例年の約2倍の160名に達しました。8月に開かれた中学校教員への説明会では、豊能・三島地区の他に東大阪市など遠方からも参加があり、その数は71校に達しました。関心は深いようです。その後、11月の第2回、12月の第3回学校見学会においても例年の2倍以上の参加者だったそうです。

クリエイティブスクールとして、現在箕面東高校には多くの特色があります。例えば選択科目では、国語、数学、英語など教科だけではなく、興味・関心や進路希望に応じた教科書にないような科目が70あります。「ゲーム創作入門」「旅発見」「劇表現」「声優実技」「大学で学ぶ心理学」等、他校では見られないような科目が目白押しです。専門学校や大学などと連携した科目も数多くあります。また、週一日連携企業などで長期間の実習を受ける箕面東版デュアルシステムという選択科目もあります。また、教育相談も多様な生徒の多様なニーズに応じられるよう充実しています。このように積み上げてきた教育活動を土台に、エンパワメントスクールとして、目指す学校像をさらに明確にして再編成されるのです。

エンパワメントスクールの特色の一つは「つまずいたところを学び直す授業」です。国数英の3教科は、1年次には30分授業にして毎日学習します。内容は基礎基本から高校レベルまで、それぞれに応じたものです。このような授業形態を習熟度別授業といいます。2年次、3年次も学習進度に応じた授業を展開します。

答えが一つでない問題を考える授業（エンパワメントタイム）も大きな特色です。箕面東高ではどの学年でも週に4時間ずつ

あります。ここでは主に身近に起こる問題を取り上げて、自分で考え解決していく力を身につけます。対話や討論を中心に授業を進めて、コミュニケーション能力を引き出します。

進路の目的に合わせ、「情報・ビジネス」、「環境・サイエンス」、「人文・アート」、「福祉・スポーツ」、「国際・コミュニケーション」の5系列の科目群がつくられますが、系列の授業もエンパワメントタイムです。さまざまな角度、様々な立場から考えることや自分の考えをわかりやすく発信することが重視されます。

箕面東のことをよく知って

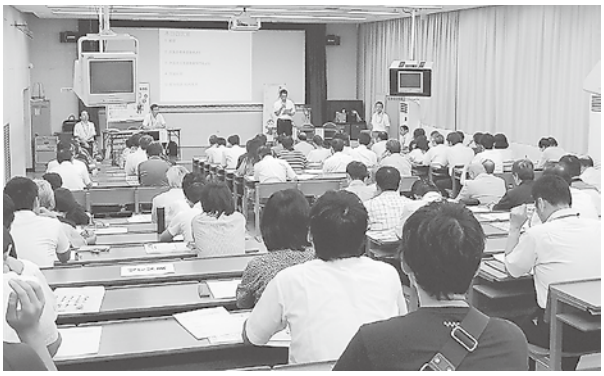
箕面東高校では

・チャレンジ精神あふれる生徒
・自分の力を人や社会のために役立てる気持ちの強い生徒
・規律を守り、学校生活を充実させたい生徒

このような生徒を求めています。

現在の学力だけで進学先を決めるのでなく、箕面東に行きたいという進学意欲や学習意欲を持ってください。学校見学会やホームページなどで箕面東高校のことをよく調べて、目的意識を持ち、積極的な行動ができる生徒を待っています。」

校長先生にエンパワメントスクールとして箕面東高校が求めている生徒像をお聞きしますとこう説明されました。



入試では面接試験が導入されます。面接試験では箕面東高校のことをよく知って、どのような特色をどのように活用して自分を向上させていきたいのかを、しっかり考えておくことがポイントになりそうです。入試の詳細は各中学校の先生によく聞いておいてください。

11年前に似たコンセプトでスタートした、東京都の「エンカレッジスクール」では、予想以上に受験生が集まり、高い倍率になっている学校もあるとのことです。真剣に学び直しを志す人の希望はかなえて欲しいものです。

（編集委員　長瀬 尚）

子どものきもち

駄菓子屋さんからみえる地域の子どもたち
～未来の社会の作り手「だがしや楽駄屋」のおはなし

●はじめに

いつからだろう。ポケットに入った小銭を手で確かめながら通った町の駄菓子屋さんがなくなっていったのは。

子どもたちの生活圏を潤いのあるものにしていくために、おとなは何ができるのでしょうか。

そんな気持ちで「駄菓子屋」で子どもたちの地域の居場所づくりをされている「だがしや楽駄屋（らくだや）」（萱野2丁目11当対池公園東）の尼野さんと松淵さんにお話を聞いた。

●だがしや楽駄屋でのこどもたち

楽駄屋を立ち上げた尼野さんは、いいます。「ここでのルールは、ごみはゴミ箱へ・ものはとらない・けんかはしないの3つぐらいで、楽駄屋が子どもたちの居場所として感じられることを念頭においた」とか。コンビニより安いお菓子とおもちゃと変なおばちゃん、おっちゃんがいる楽駄屋は子どもたちの隠れ家的居場所をめざしました。

現在の楽駄屋主人の松淵さんは、さらに最近の子どもたちの変化について気になることがあるといいます。松淵さんに、いくつかの場面を紹介してもらいました。

＊楽駄屋でお菓子を買った子は、店前のベンチなどで食べることもできるのだけれど横並びで自分のゲーム機からぜんぜん目を離さない。そんな状態で会話を続けている。顔も見ないでそんな友達関係って大丈夫かなと?

＊賞味期限を気にする子どもが増えた。食の安全で気にするのは付き添ってくる親（主に母親）なんだが。

ただでせしめようとする魂胆がみえてくる。

＊このあいだも熱中症でしんどかった子のSOSをキャッチでき、保護者にも連絡ができた。安全ステーション的なこともでてきているのかな。

●だがしや楽駄屋を進化させたいと願ってるのが実情です

尼野さんも松淵さんも地域に潤いを発信できる「居場所」として楽駄屋を続けることに意味があると強調します。（潤いのある地域って読者の方はどう考えますか?）

経営的には困難な面があり、なくなっていった先輩駄菓子屋は、箕面の中にも多くあると思います。それでも、子どもたちの生活圏の充実を思うと駄菓子屋を地域で支える必要性を痛感します。この8年半、もし、楽駄屋がなかったらどうなっていただろうと子どもたちの顔が浮かびます。

子どもの貧困が進み、子育てや子どもの社会体験の格差がさらに広がりそうです。

それは経済的なものばかりではなく、地域や人とのつながりの薄さもでてくると思います。

そんな時代の渦中にいる子どもたちの姿に気づいている私たちおとなには何ができるのでしょうか。

地域で子どもたちが豊かに過ごせる多様な「居場所」がつくられていくこと。

そこに、心あるおとなが積極的に楽しんで参加できるような仕組みがつくられていくこと。

継続できる「居場所」のアイデアが生まれてくるような小学校区ぐらいのしゃべり場をつくっていくこと。

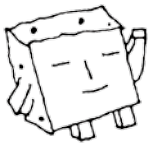
尼野さんと松淵さんは今後の楽駄屋の可能性も展望されていました。子どもの言動の変化にあわせて楽駄屋も変化させていくことが大切なことで、子どもも含めて地域住民の居場所となるようなしかけづくりのアイデアを模索中だそうです。

今後も、さまざまなしかけで子どもたちを見守っている地域の人のレポートができればと思いますのでぜひ、情報をお知らせください。

（編集委員　井原 芳朗）

ちまちま工房の紹介

カケラをあつめてカタチをつくる　障害のある人とない人が共に働く



一人ひとりが大切にされる働き方というコンセプトで立ち上げ桜井市場で活動をされています。

障害のある人とない人がいっしょに働く場として4つの事業を起こしているちまちま工房さんにお話を聞くことができました

●ちまちま工房のはじまり

ちまちま工房は今年で活動5年。「一人ひとりが大切にされる働き方」をコンセプトに障害のある人もない人も、みんなで知恵を合わせて働けたら楽しいのではないかという永田代表の思いから、2008年に立ち上げられました。

公設阪急桜井市場内の空き店舗を利用して、「ちまちま堂」を開店。手作り雑貨&絵本が読める店（地域コミュニティ事業）

チラシのデザインや、編集などの印刷（DTP事業）

自主講座や企画などの開催（企画事業）

この3つの事業から組織運営を始められました。

●共に働く場「お豆腐プロジェクト」のはじまり

2011年に桜井市場で50年以上営まれてきた「池内豆腐店」の店主池内さんに、「わたしたちにお豆腐屋さんを継がせてください。一人ひとりが働きやすい仕事場を桜井の土地で一から作っていきたいんです」というお願いをされたそうです。その熱い思いに池内さんが応えてくださり、「ちまちま工房お豆腐プロジェクト（共働事業）」としてお豆腐作りの修行を開始されました。朝の5時から製造や配達など、メンバーが毎日こなし、今ではオリジナルのお豆腐やがんもどきは工場長の炭川さんが作れるようになったそうです。炭川さんが豆腐作り、永田さん、大野さんが配達、イラストが得意な平さんはラベルを制作し、受注管理や販売の準備も山下さんとともにを担当されています。障害がある人もない人も一人ひとりが持つ力を尊重し、役割分担されています。そしてまた、それぞれが適材適所で、一人ひとりが大切にされる働き方を実践されています。

●最後に

代表の永田さんは「去年からはじまった大豆つくりをはじめ、街や人がゆるやかにつながっていく営みを少しずつ拡げていきたいと思っています。取り組む前から「できない」ではなく、どうやって工夫すればできるのか、とことん話し合って積み重ねる働き方はとてもクリエイティブです。ぜひみなさんもいつでものぞきにいらしてください！」お豆腐の工場の見学や「共に働く」活動のお話なども受け付けているとのこと。興味持たれた方は、ぜひこちらまで。

「障害者」とともにを考える企画グループ
ちまちま工房
TEL 072－735－7901
FAX 072－725－0244
E-mail megane@chima-chima.com

人権教育推進会議情報紙　はじけるこころ

発 行　箕面市人権教育推進会議　箕面市教育委員会　人権教育課
TEL 072-724-6921 FAX 072-724-6010
E-mail edujinken@maple.city.minoh.lg.jp

ご意見、ご感想等ございましたら上記宛先までお寄せください。
ホームページ　http://www.city.minoh.lg.jp/edujinken/jinken/jinken.html